永井隆『輝やく港』（未発表作）
－作品と原稿－(1)

An Introduction of Takashi Nagai's Kagayaku Minato [A Bright Port] from the Original Manuscript

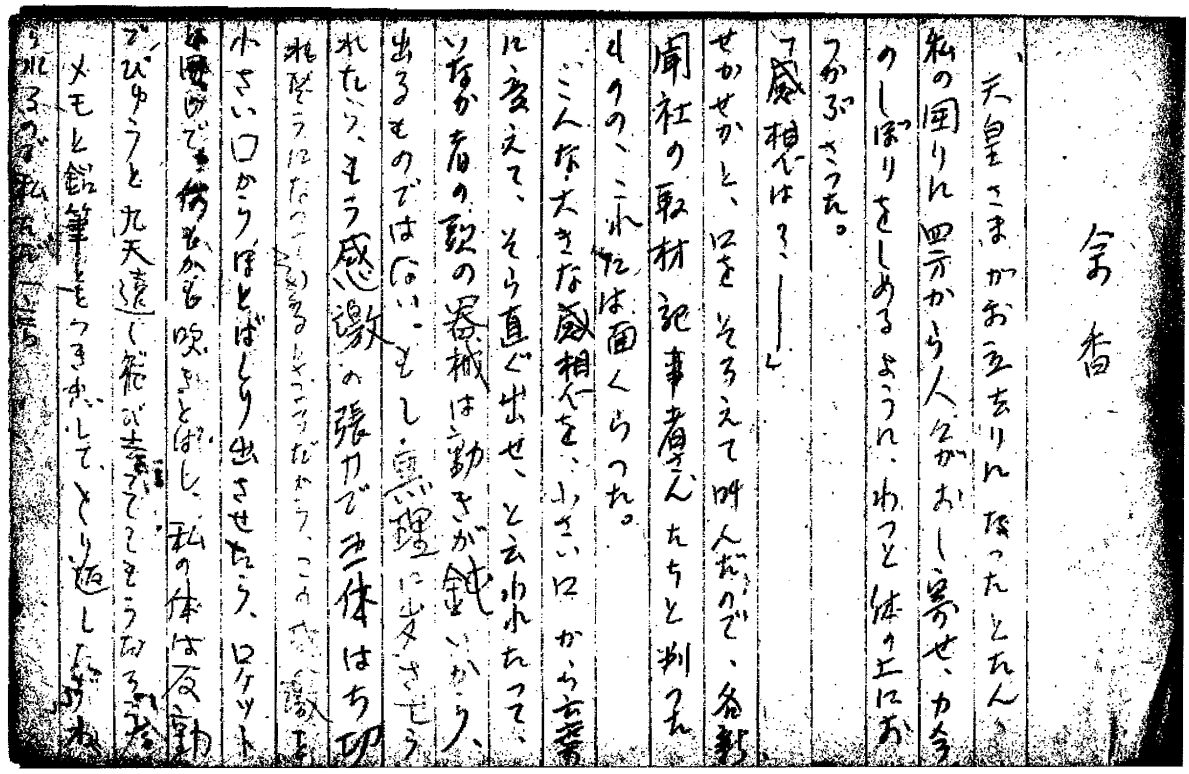
小 西 哲 郎

Abstract

The aim of this paper is to disclose the existence of Dr. Paul Takashi Nagai's unpublished work titled Kagayaku Minato and to give it a partial introduction. The manuscripts, written on notepaper in pencil, were discovered in the storage facilities of Nagai Takashi Memorial Museum, in Uenomachi Nagasaki. They are discolored with age and supposed to be the latter part of the whole. The former part might be lost.

序

永井隆（1908 － 1951）の未発表の作品『輝やく港』の原稿が長崎市永井隆記念館（長崎市上野町）の書庫に保存されていた。原稿は二冊の便箋に、大部分が鉛筆で、一部がペンで書かれていた。



「輝やく港」の原稿（今回確認された部分）の第１ページ

便箋は、経年のため茶色に変色しており、もろくなっていた。一冊の便箋の表紙には「(3) 輝やく港」、もう一冊の表紙には「輝やく港　完」と書かれていた。

この作品については、『長崎日日』記者による著者へのインタビュー記事に言及がある[1]。しかしその原稿が発見されず、作品の存在自体が疑問視されていたものであるが、今回それが確認されたことになる。なお原稿末尾の「あとがき」が書かれた日付は、1950年3月19日であった。

見出しは以下の通り（一字下げが小見出し）。

(3) 輝やく港
　余香
右腕
　二
クリスマス
　一九四四年
　一九四五年
輝やく港　完
　一九四七年
　一九四八年
　一九四九年
　一九四六年
年末
初めに
あとがき

便箋の表紙の（3）や「完」という記述から、この作品の原稿は、元来四分冊になっていたと考えられる。(3) の「余香」の内容も、それに先行する文章の存在を示唆している。しかし今回の調査では、この二冊（つまり第3部と第4部）のみ存在が確認された。本作品の前半部（第1部と第2部）の原稿は紛失したものと思われる。

本稿では、永井隆記念館の永井徳三郎館長の許可を得て、確認された原稿の全文を掲載する。ただし紙面の都合上、一括掲載ができないので、これを二分割し、以下には原稿第3部の「余香」以下、「クリスマス」の「一九四四年」までを紹介する。原稿の難読箇所を解読するにあたり濱里欣一郎氏（長崎如己の会会長）のご協力をいただいたことに感謝を申し上げる。なお本文中のルビ・用字法は原作者のものである。

（永井隆『輝やく港』より）

余香

天皇さまがお立去りになったとたん、私の囲りに四方から人々がおし寄せ、カメラのしぼりをしめるように、わっと体の上におっかぶさった。

「感想は？――」

せかせかと、口をそろえて叫んだので、各新聞社の取材記者さんたちと判ったものの、これには面くらった。

こんな大きな感想を、小さい口から云葉に変えて、そら直ぐ出せ、と云われたって、いなか者の頭の器械は動きが鈍いから、出るものではない。もし無理に出させられたら、もう感激の張力で五体はち切れそうになっているところだから、この感激を小さい口からほとばしりださせたら、ロケットと同じで、何もかも吹きとばし、私の体は反動でびゅうと九天遠く飛び去っててしも(ママ)うだろう。

メモと鉛筆とをつき出して、くり返したずねられるので私ただ一言

「うれしかったですばい！」

といって汗をぬぐった。

記者さんたちは、原稿締切に間に合うかな、とか、バス待たせとけ、とか口々に云いながら走り去った。

私はそれから一人しずかに感想を云葉にととのえることに取りかかった。窓から町の万才の

声が波のように聞こえていた。

天皇さまをお迎えして

天皇は科学者にませば大学の
構内にありて落着き給う

天皇はわたくしに親しく御顔を寄せ
ねぎらい給うきこゆる御息(おんいき)

天皇はわたくしの本を読みましたと
ふとのたまいぬ涼しき御まなこ

天皇は父親のごとくわたくしに
病いたわれとのぞきこみ給う

御愛用の拡大鏡はどのポケットに
おさめいますやと親しみ見上ぐ

天皇はきのう雲仙にて硫化物を
しらべ給いて荒れしおん指

勉強して善い日本人になってねと
やさしき御言(みこと)子らに透(とお)りぬ

原子雲の下に生きたる親と子と
天皇に笑顔を見せまいらせぬ

あどけなきわが子の返事こころよし
天皇もにっこりほほえみ給う

天皇もほほえみ給いしばらくは
みんなほほえみいたりけるかも

私がこんな風に感想をまとめているころは天皇さまが原子爆弾の中心地のあたりをお行きになっている時刻であった。天皇さまはあのあたりを親しく御覧になって、どんな御気持ちであったろう。きっと亡き人々のため祈って下さったにちがいない。

放射能地帯にありし微生物の
運命も御意識にのぼりたらんか

天皇の見めぐり給う原子野の
モンシロチョウもお目にとまれよ

私はこのあたりに命果てた人々の霊魂と今日の巡幸とのことを想っているのだったが、それはどうしても云葉にあらわせぬ深い感想であった。霊魂がよろこんだであろう、というように手軽に云いあらわせない。とにかく私は、まず隣の言(ママ)で焼け死んだリウマチス患者のために祈り、この大学で死んだ教授、学生、看護婦のために祈り、このあたり一帯に骨をさらした人々のために祈った。

それでもまだ心のうちの歓びと感謝とをすっかり霊魂に伝えることができない気がして、わがままな頼みではあったが、教室の焼跡のあたりを担架でまわらせてもらった。それから納骨塔のみえる所まで運ばれていって、お祈りをした。担架をおろしたのが雑草の上だったから、草が折り敷かれて、春らしい香りを放った。

そのとき、急に胸が苦しくなり、せぎ(ママ)が相次いで出た。そして全身に軽いむくみが出てきた。朝長主治医や看護婦長さんらが私をとりかこんで、少々あわてた。心臓部を氷水で冷やしてもらっているうちに落着いてきた。……そして私はそのまま眠りにおちたらしい。

トラックに乗るときからのちはよく分かっている。うちへ帰りついて、うす茶を頂いたら、すっかり元気づいた。朝長主治医が脈をしらべ、婦長さんたちとほほえみを交し、帰っていった。

松江からわざわざ来ている六十一歳のいわ伯母さんも町から帰ってきて「やれやれ、もう思い残すことはありません。ゆきと帰りと二度、

天皇さまは私の前を、すれすれにお通りになり、私の方を向いて御会釈して下さいましたよ。ありがたいことでございました。」
と云った。この伯母は長男はシベリアへ連れてゆかれたきりである。

弟の家族も帰ってきて、私の方を見て会釈して下さったと、大満足であった。近所の人々も寄り合っては、同じことを云い、よろこんでいた。みんな、これで、これまでの苦労がいっぺんに消えてしまったのであった。

弟が大学から白バラの一鉢をかかえて帰ってきた。これは弟が丹精こめて咲かせ、今日大学の階段の踊り場へ飾っておいたものであった。私が笑顔でお迎えするにしても、やはり病人だから、いたましくお思いになって階段をお帰りになるかも知れぬ。その御目から私の残像を消し去るために、白バラの花をそこへ置いたのであった。

この花が天皇さまの御目に、さわやかにしばし映ったか、どうか？――

白バラは如己堂の庭にかえって咲きつぎ、高い香りを放っている。

右腕

これは一つの魂がどんなにねんごろにいたわられたか、という話である。

聖フランシスコ・ザベリオ来朝四百年記念式典の第一日の祭が長崎市で行われた次の日――一九四九年五月三十日――の朝、浦上天主堂の祭壇の真ん前に私は寝たまま、歓びと望みに心みちて感謝の祈りをささげていた。私のうしろの方にも、ロザリオの玉のゆれて触れ合う音がひっそりとしていた。いま私たち病人のためのミサが終ったところで、やがてここへ聖人の右腕がささげられて来ることになっていた。

天主堂の中はただ一人祈っていても、二千人祈っていても、同じようにひっそりしたものだが、今とくべつ静かなのは、ここに参っている二十人ばかりの者は、私のような不具廃疾のみであるからであった。原子爆弾でやられた者が多いが、そのほか、てんかん、めくら、足なえなど、ミサにひとりでは来られぬ者ばかりだった。今日は聖ヴィンセンシオ会員が担架やリヤカーで家々へ迎えにきて運んでくれたから、久しぶりにミサにあずかることが出来、聖体も拝領して、それこそ天にも昇る歓びを与えられたのである。

昨日のこの時刻には、この天主堂の北側の広場に三万の信者が集まり、スペインのオルディス司教によって荘厳ミサが歌われた。今朝は二十人ばかりの不具廃疾のために、静かなミサが読まれた。聖体の形色の中に真にまします生けるキリストは、昨日も今日も変りなく、一人一人の口より入って、その一人一人の霊肉と一致し給うたのであった。

昨日のミサの祭壇には聖人の右腕も置かれてあった。三万の信者は親しくそれを仰ぎ、超自然の力を与えられたと云う。私たち病人も同じ恵みを願っていたのはもちろんである。憐れみふかい天主は私たち病人をいつも忘れなさらない。またサンシャン島の浜べに熱病にかかって行倒れ、たった一人の信者にみとられてこの世を終った聖人もまた私たちを顧みたのであろう。いや、教皇特使ギルロイ枢機卿さまのやさしい思いやり、長崎の山口司教さまの愛児たる信徒にそそぐ愛情がひそかに動いたことを見逃してはならない。――今日は巡礼団の休養日に当てられ、雲仙へ登った組もあり、歓迎会に招かれた人々もあったが、教皇特使を初め司教さま方や神父さま方はそれぞれ霊的な活動をしておられたのである。聖人の右腕は今日夕方まで大浦天主堂に置かれることになっていたが、それを仰ぐために人々が参って来るまでの朝のひととき、とくべつに浦上へさげて来て、昨日の式典にあずかることの出来なかった私たち病人

にも仰がせて下さることになったのだった。これは公けの予定にはまったくのっていなかったことで、いわばこっそりと御恵みを分けて頂く機会であった。この話を神父さまからささやかれたのは、四五日前のことだった。貧しい病人たちは、あまりにも思いがけない話に、とぼけるほどだった。すべては神父さまの方で手をまわして下さったらしく、私たちは寝て待っているだけだった。そして、今こうして天主堂に、まくらを並べて祈っている次第である。

入口に自動車が来て止まる気配がした。天主堂ではうしろを振り向かぬことになっている。私はこくりと、つばをのんだ。

足音が近づく――聖フランシスコ・ザベリオの足音……。

聖人の右腕をささげて来られたのは山口司教さま、里脇司教さま、中島神父さま――いずれも潜伏キリシタンの子孫、聖人が四百年前に肥前に伝えたキリスト教を父祖代々そのまま守り伝えた、腹からの信者であり、生まれてすぐ洗礼を受け、大きくなってローマに学んだ司祭――であった。

右腕は祭壇の前の小机の上に置かれた。ひと目仰ぎみたとき、私の中に全く新しい力が、タイヤに空気をつめこむように、ぐっ、ぐっと注ぎこまれるのを感じた。それは霊的な力であったが、また五体の肉にも力がこもってくるのを感じた。

右腕はひじから先で、手のひらの方が見えるように、ガラスの器に入れてあった。ガラスはほんのり黄色を帯びてはいたが、よく透きとおっていた。その器の形は腕の形に合わせて作ってあった。それが箱に収めてある。箱のふたは真中で縦に分かれて、両方へ開かれるようになっていた。この箱の内側にはくれない色のビロードが張ってあり、それに白と赤のカーネーションと白いカスミソウの花が飾りつけてあった。

私は聖人の御取次ぎを頼んで祈った。「……ああ天主、主は東洋の人々を教会に入らしめんとて、聖フランシスコ・ザベリオをして、極めて有効なる説教及び奇績(ママ)を行わしめ給いし如く、今日我らをして聖人の偉功を賛えしめ、かつその聖徳にならわしめ給わんことを希い奉る……」

司教さまを(ママ)神父さま方も祭壇にひざまずいて祈っておられた。

やがて司教さまは立ち上がり、右腕を箱ながら持ち、私の前へ来られた。私は目をよく澄ましして、ず(ママ)ぐ目の前に止まった右腕を仰ぎみた。そして

「東洋の使徒、われらのために祈り給え」ととなえ、器のガラスに接吻した。

私はまさ目に見た。その右腕を……。

スペインのザベリオ城の若君として生まれ、母君の頭飾りの宝石をおもちゃにした手

十九才の秋、将来大学者になる望みに燃え、馬に乗ってフランスを縦断し、パリ大学に入ったとき、手綱を握った手

将来必ず大学者か大政治家になると折紙つけられたほどの優れた学位論文を書いた手

戦の傷がなおって大学に入ってきたロヨラ城の勇士イグナチオと握手した手

イグナチオの「人たとい全世界を得るとも、その魂を失ったら何の益になろう」という云葉に初めて魂の目がひらけ、今まで抱いていた大学教授の夢よりも更に高い仕事、十字架の道の説教者、福音の伝道者となる決心を固め、イグナチオら六人の同志と共にイエズス会をつくり、すべての財産を貧しい人々に与え、ただ一つの十字架を固くにぎった手

インド、マレー、香料群島などの蛮地で多くの病人の足をさすり、祝福を与へ、聖体をさずけた手

初めて日本人に洗礼を施した手

鹿児島――平戸――山口――京都――主の福

音を伝え歩む幾山河に杖をついた手

明に布教しようとして広東港外サンシャン島の浜辺に死んだとき、十字架をにぎっていた手

墓に埋めて二か月半たって、改葬するため掘り返してみたら、生きていたときのままだった肉体、それをインドのゴアに葬ったが、後にこれだけ切り離し、ローマに送られ、イエズス会の聖堂に安置された手

このたびの式典のためにローマから飛行機でアメリカを経て此処へ来た手

つまり生きている間には、教皇パウロ三世の命を受け、ローマから東へ向って日本に至り、死んで約四百年のち教皇ピオ十二世の命により西まわりに日本に来て、結局地球をひとまわりして、天主の全能を示した手

奇績(ママ)の右腕と呼ばれている手

なまのままの手

聖人の手

愛の手

天主の御手の手袋

天主のもとへ人類をまねく手

今もなお無言の伝道を続けてやまぬ手

新しい伝道者をふるい起す手

だが、見た目には当りまえの人の手

私の右手と似た右手

……私は黙想をつづけた。右腕は他の病人たちの接吻をうけてまわっていた。この右腕は今夜長崎をたち、鹿児島に向うが、それから九州をひと回りし、山陽道から東海道、東京で六月十二日巡礼最后の式典の教皇特使の盛儀ミサの祭壇に置かれ、それから北海道へゆき、奥州路から北陸道、七月十日新潟までささげて回られる予定となっている。四百年前に訪れた日本は足利時代の末、十一年間にわたる應仁の乱のあとで、国[2]民は霊的にも物質的にもどん底ぐらしにあえいでいた。このたびもまた同じ有様のところである。四百年前の日本人は初めてキリストの福音を聞いて、真理にうたれ信仰に入る者がおびただしかった。このたびは日本人は正しくキリストの福音を聞くのである。真理にうたれ、すなおに信仰に入る者がおびただしいであろう。生きた聖フランシスコは大そうな苦労をして、ようやく京都の天皇さまのもとまで行った。彼の右腕は特別仕立ての車にのせられ、国をこぞっての歓迎を受けながら日本全国を回るのである。聖フランシスコの福音伝道の仕事は途中で打切られたようにみえたが、実はこんな形で四百年を過ぎたのち、大きな形で続けられている。

四百年の学者が考え出した学説で、今日もなお正しいと認められ、学問的生命を保っているものが幾らあろうか？――亡びない仕事と、はかない仕事と……聖フランシスコ・ザベリオは確かに彼の才能をもっとも高く生かす道を選んだ。

大学教授であるよりも、大政治家であるよりも、東洋に初めて福音を伝える神父である方が大きな仕事、高い値打ち、そして難しい勉強であった。大学教授にも、大政治家にも成り得る実力を有っていたから、福音の伝道をすることが出来た。たった一人で、十字架と祈り本の他には何も持たずに、遠い東洋へ出かけてくる勇気は、ただの愛からだけ生まれたのではなく、これだけの実力があったからこそ現われたのである。だれから何を尋ねられても、その場ですぐ、てきぱきと正しい答えを述べることができて初めて、人々の信頼を得られるもの。宗教上の問題だけでなく、天文学、医学、航海学、工学、そのほか人間の生活に直接関係の深い知識はことごとく有っておらねばならない。なぜなら信仰生活とは正常の人間生活なのだから――。

私は奇績(ママ)の右腕に接して、いまさらのように自分の右腕をかえりみた。――怠けて四十年を過ごした右腕だった。

やせ細った私の右腕。……しかし今では五体のうち、この右腕だけが、どうには(ママ)仕事をする

のである。この腕を聖人の腕にあやからせたい。聖人の腕が働きつづけている大仕事のお手伝いをしたい。東洋に福音を伝える仕事のために、私の小さな右腕をささげたい。

二

山口司教さまが私の傍へ寄り、耳もとにささやきなさった。

「枢機卿さまがあなたに会いたいと申しておられるが、どうしますか？――」

それは全く思いもうけぬ云葉であった。私は、どきまぎしたが、

「お目にかかります」

と答えた。

「それでは、そう御返事しましょう。ところで、何処でお会いしますか？――枢機卿はあなたのうちへ行ってもよい、と申しておられますが……」

「いや、それは余りに恐れ多うございます。この公民館でお待ち致します」

「では――そう致しましょう。今から電話でお伝えするから、あと三十分ほどすれば、おいでになります」

司教さまは父のあたたかさのこもる手で私を抱いて話しました。それから立って聖人の右腕をささげもち、私たちに祝福を与えて下さいました。

私たちは右腕を送ったのち、感謝の祈りをとなえました。

私たちは公民館の應接室に移され、ここでギルロイ枢機卿のおいでを待ちました。そこにいるのは僅かな人数でした。人間であるというほかには何の値打ちもない浦上の里人たちでした。

枢機卿――カルジナルといえば教皇に次ぐ位にあり、教皇は枢機卿の互選によってきまるのですから、私たち平信者からは高空の星のように仰がれるお方でありましょう。そのうえこの巡礼では公けの日程がきまっていて、とても余った時間のあるはずがありません。それなのに、病人の私たちを見舞い、云葉を交したいと申されたのは、どういうお考えなのでしょうか？……

この事については昨日まで何の話もなかったのである。おもうに今朝の食卓での雑談のうちに、私たち浦上の病人のことが話の種になり、枢機卿が、それではちょっと見舞いにゆこうか、と云い出されたのではあるまいか？……枢機卿という地位、教皇特使という役目を離れ、ほんの隣人として、霊的父として、私たち原子野に病み臥す者を慰め、力づけ、天主の福音をさらに新たに伝えたくなって――……

公民館が建ってから初めて私はこの室へ来たので、室の内も外もめづ(ママ)らしかった。窓をがらりと開け放って、ここから原子野はひと目で見渡され、爆心地は五百米ばかりの所に公園らしい木立を見せている。昨日の雨があがり、春たけなわの光の中に、新緑がしっとりと輝いている。天皇さまがおいでになったのが、さきおとといの、お立ちにたっ(ママ)たのがおとといの朝。その夕方には枢機卿の一行がおいでになったというわけで、長崎市最大の歓びが二つ続いた。このため縣も市も力をありっけ(ママ)け注いで、この原子野を片付け、美しく整えてお迎えしたのであった。いま窓から見ると、私の知らない大道路が美しく光り、並木も植えられ、あの日の思出のよすがとなる醜い残り物は影を消していて、何とも云えぬ、すがすがしい景色であった。ことに驚いたのは、家らしい家がたくさん建って、風景の中にひとまず落着いていることであった。家々には洗濯したおむつが光り、ゆったりと煙をあげていた。

天皇さまはこの立ち直りを見て御安心なさったであろう。世界の国[3]々から集まった巡礼団の人々はこの土地への天主の御恵みの豊かに

注がれているのを目のあたり見て、あの火の柱がソドマ、ゴモラの火とはちがっていたことを知ったであろう。私もまた浦上が天主からとくべつ愛されているとの確信を今さらのように新たにした。

「ああ、あの車だ」

と神父さまが云った。

一台の自動車が松山町の爆心地の横から天主堂へ向って来る。おしのびという云葉は当たらないが、公式の行列でないからとはいえ、ただ一台でおいでになるとは、まことに思いがけないことであった。

室の外や内に人々はひさまずいてお迎えした。

すうっとお入りになった。……大きな微笑みである。大きなほほえみの雲が入ってくる、と思った。あたたかい春の雲が天から降りて来たように思われた。

教皇特使ノーマン・ギルロイ枢機卿は居並ぶ信者たちに、にこにこと会釈してから、私のすぐ右側にぴったりとお寄りになり、左手を胸にあて、私の上に顔をうつむけ、やさしい、気づかわしげな目でじっと私はその手をにぎり、くすり指のもとにはめられた、大きな金指輪の宝石に接吻した。

大きな手であった。柔い手であった。ほのぼのとあたたかい手であった。生きる歓び、生きる望み、生きる力を与える手であった。この右手は教皇の手もとにぎりあった。この手は天皇さまとも握手した。この手はロンドンで、ワシントンで、シドニーで、いたるところで、世界を導く人々と親しくにぎり合った。偉大な人物の手だけではなかった。貧しい人、病める人、幼い子どもらの手をもとった右手である。いつもにこにことほほえみながら、世界中のいろいろな階級の人々と仲よくにぎり合った手である。一つの手である。みんなを一つにまとめる手である。「さいわいなるかな、和睦せしむる人、彼らは神の子ととなえらるべければなり」――これは和睦せしむる人の手であった。

真赤な帽子、真赤な帯、胸にかけられた大きな金の十字架――枢機卿の服をきておられるから身分の高いお方だと思う。たとい着ておられなくても、徳の高いお方と思うことには変りあるまい。私にはただ限りなくやさしい父に見えた。

「病気だそうですね。どうか十分気をつけて養生して下さい。私もあなたを初め、浦上の病人の方々のためにお祈りを致します。またできるだけのお世話も致したいと思います。病気は苦しいでしょうねえ。……個人としては苦しいでしょうが、その苦しみを快く忍んで、キリストの十字架の御苦しみに添えてささげなさい。今の世の乱れを直すためには、犠牲と祈りの功徳が何よりも必要です。……私はよく見て知っています。教皇さまがどんなに大きな犠牲を日々ささげていらっしゃるかを……どんなに苦しんでいらっしゃるかを……どんなに激しく祈っていらっしゃるかを……。これは教皇さまが御手ずから私の指にはめて下さった指輪です」

枢機卿はそう云って、大きな指輪を指から抜いて、宝石の裏にあたる所を私に示しなさった。そこには教皇の紋章が刻んであった。

枢機卿はまた内ポケットから、教皇の御名代に任命するという教皇の親書も出して見せて下さった。その文章の一番下に教皇ピオ十二世のサインがあった。「P・P・XII・」の三字が小さくペンで書かれてあった。それは幼な子の書くような、あどけない、何の飾りもない、しかし一心のこもった字であった。私は「しもべのしもべ」という名をふと思った。

枢機卿はそんな物をいろいろ見せて、茶の間で、おやじが息子に旅帰りの話をしてきかすような、くだけた調子で語って下さった。美しいロンドン話である。リーダーの三の巻くらいな云葉である。きけば枢機卿はロンドンで世界的

大説教家の名をあたえられていたとのこと、一言一句に何とも云えない、人をひきつける力があった。思わず私もお相手して、途中で單語につまったりすると、枢機卿がそのを考え出して、私の云葉までまとめて下さった。

「聖フランシスコ・ザベリオは教皇パウロ三世から親しく命を受け日本へ参りました。その目的は福音を伝えることでありました。彼は大説教家でした。しかし、それにもまして彼は大実行家だったのです。信仰と愛の善業をもって、彼はおびただしい日本人を天主のもとに連れ帰りました。知らぬがゆえに偶像を拝む誤りを犯していた日本人を……。私は教皇ピオ十二世から親しく命を受けて今ここへ来ています。ほんとうは教皇さま自ら日本へ渡って式典を司りたかったのですが、忙しくておいでになることが出来ず、私を名代にお遣わしになりました。教皇さまは心から日本人を愛していらっしゃいますよ。この式典を機会に、聖人の取次ぎによって、日本人が真理に目ざめ、真の幸福を得るように祈っていらっしゃいます。この巡礼団を迎えて日本人の皆さんが心から歓んでいるのを見て、私は感激しました。このことを教皇さまへお伝えするのが楽しみです。きっと教皇さまもお歓びになるでしょう。……」

「信じている人も、まだ信仰に入っておらぬ人も同じ天主の子ですから――」と私は云った「この式典に集まって、いっしょにお祝い致しました。四百年前にこの長崎へ伝わった信仰と、今私たちが抱いている信仰とは、少しも変っておりません。ずっと大昔から、この信仰は変ることなく伝わりました。そして、昨日ここに集まった人々は世界各国[4]から巡礼に加わったもので、民族は異りますけれど、抱いている信仰は少しも違っておりません。私は、ただ一つの天主の子として全人類が一致する日が必ず来そうな気がします」

枢機卿は静かにうなずいて、両腕を左右にひろげ、しばらく上を仰いでいた。

「そうです。教会は必ずその目的を達します。しかし天主の御国の成るのを妨げるものが今は暴れています。私たち信者はもっと働かねばなりません。……」枢機卿はちょっと云葉をきって、さらに次を続けた「……犠牲と祈り！……」

枢機卿は私の手にロザリオを持っているのを見つけ、大いに悦んだ。

「おお、ロザリオ！……そうです。ロザリオの祈りを私たちはもっともっと度々、まごころこめて献げねばなりません。……」

私がここに日本語になおすと、大そう説教じみてしもう(ママ)が、お話はそう堅いものではなく、私たちの感情をぐいぐいゆさぶる優しい話しぶりであった。口だけで話しているのでなく、人間が話しているのであった。

すれすれに対い合って、おだやかに、何の原稿も腹の中になく、思いつくままに語りなさるのを、堅くもならず私は時に声を立てて笑ったりして聞いていた。すると真赤な枢機卿の帽子も帯も、服のふちとりも消え、黒いスータン服の神父さまにみえ、時にはそれも消え、平服のおやじさんのように思えることもあった。これなら幾時間お話していても、肩は凝るまい。

だがお忙しい体であった。枢機卿はやさしく、もういちど私の手を握り、天主の御恵みを祈って下さった。そして一同におごそかに祝福をお与えになった。

枢機卿がおたちになったあと、一同はしばらく感謝の祈りを天主にささげ、浦上がつねに忘れらず(ママ)にいることをうれしく思いかえした。

バーン神父さんが見送りをすまして室に帰ってきて、六尺余りの体をどしんとソファに投げこんだ。

「ああ、きつか……」

それが神父さんのおどけた声であった。きつい、というのは疲れたの意味。長い脚がそれこそ今

は棒みたいに疲れきっているらしかった。枢機卿をお迎えする行事はこれで終ったのである。何日ぶりかに初めてソファに腰をおろしたバーン神父さんであった。長い脚をもみながら、にこにこしている。

バーン神父さんはオーストラリアのシドニーから去年来たばかりの若い司祭であった。ギルロイ枢機卿はシドニーの大司教であり、バーン神父さんの直接の長上であった。この前にいちど枢機卿はこの天主堂の献堂式においでになった。そのとき長崎の霊的復興を助けるために司祭を送ることを考え、あとでバーン神父さんたちを遣わされた。だからこの式典でギルロイ枢機卿が教皇特使ときまったときのバーン神父さんの悦びようといったら！……それこそ国もとから親父が来るのだから、まるで子供のように飛びまわって歓迎準備をした。そしてついに昨日の大式典。……枢機卿にまつわりつくようにしてお世話なさったそうだ。二十台(ママ)の若さで、ただひとり北半球(ママ)から赤道越えて船路はるかに来て、うらさみしい原子野に暮らしていては、やっぱり青年なのだから、ふるさとのシドニーの火をなつかしく想出されることもあろう。久しぶりに枢機卿にお会いして、今ついに別れた。ぐったりとソファにうずまった大男の神父をみて、私はほろりとした。

聖フランシスコ・ザベリオだって、やっぱり故郷スペインのザベリオ城を想出して、日本にあるのをぼうっと忘れる時があったろう。そういう人間感情が強かったからこそ、あれだけの愛の実行家となれたのである。

聖人もまた一日じゅう道に立って説教をし、病人を見舞い、へとへとに疲れて、道ばたの石の上に

「ああ、きつか！……」

と腰をおろしたこともあったろう。

人間離れをした豪傑ではなく、普通の肉体を与えられた人間であったからこそ、あんなに日本人から愛されたのであろう。

けれども聖人の顔には、いつも安らかなほほえみがあったに違いない。いま見た枢機卿の顔のように……。

クリスマス

一九四四年

中立国といえども外国[5]人はスパイをする疑いがあるから、一切の外国人と附合ってはならない。――という市民(ママ)の間に伝わった。特別高等警察から出た命令だとも云われ、憲兵隊から出たのだとも云われていたほどで、実のところ何処から出たのか、だれも知らなかった。はっきりと町内会長に書面で伝えられたのでもなかった。それならば、そのころはやりのデマだったかと云うと、そうでもないらしく、外国[6]の宣教師と立話をしたので捕えられ留置場に入れられた者もあった。ダガルカナル(ママ)島の戦いを山として、日本軍が押し返され始めたので、みんなは不吉な將来を云わず語らずのうちに予感し、神圣をいらいらさせているのだった。

そういう空気の中にあって、いちばん困ったのは、本河内にあるポーランド人の修道院だった。フランシスコ会のコンヴェントゥール派に屬していたが、一般には「聖母の騎士」の名で通っていた。神父が三人、平修士が十人ばかり働いていた。ほかに日本人の平修士と神学生とがいたのだが、ほとんどみな兵役と徴用に呼出され、俗世間で働いていた。この会の本部はポーランドにあった。この戦争の最初にドイツ軍がいきなり攻めこんでポーランドを奪ってしまった。そこで今ではドイツ領同然である。従ってポーランド人はドイツ人並みに取扱われ、日本の同盟国[7]人というわけで、収容所には入れられなかった。しかし絶えずにらまれてはいた。まず神学校を休校にして、ここに連合国[8]人を

収容し、それを見張ると云って警察の外事課も移ってきた。ここに収容所のあることを連合国側へ報らせたので、ここは空襲にも絶対安全ときまった。すると軍の司令部がここの横穴防空ごうに移ることにさえなった。そんなわけで、十人余り居残っているポーランド人修道士たちは狭い棟におしこめられ、絶えず特別高等警察と憲兵とから見張られ、後をつけられ、外の日本人と附合うことを、それとなく巧みに止められてしまった。

それというのもナチスドイツでは、世界でいちばん優れたゲルマン民族の、その権化であるヒトラーは全智全能の新しい神であるという信仰を国民にもたせるため、あらぬ(ママ)る教会をいじめて潰そうとし、聖母の騎士の本部修道院もまた潰されかけていたからなのである。そんなわけで、本部との連絡も付かず、たとい付いても救けに来ることは出来なかった。

ポーランド人の体には綱をかけてはなかったが、目にみえぬ綱がしばりつけられて、実際には自由はなかった。狭い修道院の囲いの中は彼らにとって荒海の中の離れ小島であった。もともとフランシスコ会は荒行をして祈りを専らにする流で、日々の食物は家々の裏口に立って施してもろ(ママ)うことになっている。それが、こうして外の日本人との間を断たれると、たちまち餓えが襲うことになるのだった。……けれども長崎のキリスト教徒はこんな事には昔からなれていたので、うまくやった。だれかが、どこからか、食物を修道院の中へ差し入れた。

私はこの修道院の医者だったから、大手をふって出入りしても、どこからも文句は出なかった。だから私はそのころ修道院の内のことをよく知っている。

ミロハナ神父、ドナド神父、ヤヌココザ神父——みな三十台(ママ)の働き盛りだった。
平修士はゼノ、ロムアルド、セルギウス、カシアノ、ロマン、ヘンリックそのほか——三十台(ママ)から五十台(ママ)。左官、大工、裁縫、くつ直し、パン焼き、彫刻、印刷など、それぞれ得意の腕を有っていた。——この修道(ママ)全体がこの修士たちが十年かかった手製品なのであった。

こんな押しせめられた境遇にあって、みんな明るい、くったくのない笑顔をしていた。
「サンタ・マリアが必ず良いようにして下さいます！」
これがこの人々の口癖だ。ゆるがない信仰である。いや、ここでは、もうこれは一つの常識になっていた。

何もかもマリア様まかせである。そうして必ず良くいったのだから、反対はできなかったし、あざ笑うこともできない。

一つにはこんな苦しみを一度体験していたからの落着きもあったろう。第一次大戦のとき、ポーランドは激しい戦場になった。修士の一人は、自分の家とドイツ(ママ)との国境にあって、隣はドイツ人で、戦さが始まった朝は、かきね越しにあいさつして、お互いに困ったと話した。そこらでは戦線が動くたびにドイツになったり、ロシアになったりして目がまわるようだった。おまけに弾の来る方角が昨日は東、今日は西。戦争が長びくにつれて食物はなくなって、これどころではない、大そうひもじい思いをした。けれども、そのときの体験から、そんな場合には家を離れぬのがいちばん安全であると知った。一時の恐れから家を飛出したら最後、結局のたれ死にをせねばならない。

修道院をとりつぶすといううわさが盛んに流れたが、ミロハナ神父修院長を初め、だれ一人として、それを気にするものはなかった。
「サンタ・マリアは最後に勝ちます」
と私に小さい声で宣言した。

ヘンリック修士がついに胃をこわした。そうして大学の調外科に入院して胃を半分捨てる手術を受けた。萬事うまくいった。ロマン修士が附添で、それはそれは看護婦も舌を巻くほどの

世話をした。たとえば枕もとに計りを置いて、飲食いする物は一杯の湯でも、いちいち幾瓦と計ってメモにつけ、主治医に見せていた。そんなに科学的な介抱な仕方はあちらでは一つのならわしとなっているのだった。

ヘンリック修士の回復期に一九四五年のクリスマスがめぐり来た。

祖国ポーランドはナチスに荒らされ、キリスト教会はひどい迫害を受けていた。

長崎の修道院もじわじわといじめられている。そして自分は大手術のあと――……

彼はどんなにか心細い気がしているであろうか？……

「クリスマス来ます。……ね。」

彼は私にそう云った。それはクリスマスのミサにあずかりたいのだ、と私にはすぐ判った。けれどもまだ退院の許しは出まい。……私はずいぶん考えた。

彼を幸ばす手は一つしかない。それは病院のなかでミサをささげる事である。

だが……それが出来るか？――

法規の上からは、病院の仕事を妨げ、ほかの病人の迷惑になる事でないから差支えない。けれども、時局が時局である。――キリスト教徒はねらわれていた。外国[9]人には尾行がつく。集会は怪しまれる。……

……私は迷うた。祈った。そして、やった方がいいような気になった。きめた。

さいわい私たちの教室は夕方からはがら空きであった。レントゲン透視室は晝間も暗室になるように、どの出入口も二重とびらになっていて、たとい守衛などが見回っても、中の光は漏れず、歌声もきこえない。この教室には前から別に変った出来事も起っておらぬので、見回りの方でも特に念入りに調べない。落着いてミサをささげるには、ふさわしい室であった。

準備は表に現われず、すらすらと進んだ。ロマン修士が修院から運んでくる病人の着替服や身の回りの品々の間に入れて、ミサに使う様々の品を毎日毎日持ちこんだが、いよいよクリスマス前夜になり、飾ろうとして集めてみたら、あっと驚くほど担ぎこんできているのだった。

レントゲン器械をすみに片寄せ、テーブルの上に美しい祭壇を作りあげた。これはロマン修士得意の腕である。（聖フランシスコ・ザベリオ記念式に浦上の野外ミサの祭壇もロマン修士の仕事である）たまげたことには、御誕生の馬屋の飾り人形をひとそろえ、小さな羊に至るまで持ちこんでいて、りっぱに仕上げた。これも無邪気な兄弟ヘンリックを喜ばせたい一心からであったろう。レントゲン室のことだから電源はいくらでもあって、それから引いた幾十の色電球のイルミネーションはすばらしかった。

病院には医局員にも看護婦にも附添にもカトリックは多かったし、入院患者の中にも多かった。真夜中に幾時間も天主堂に行っていることのできぬ人々だった。彼らもまたヘンリック修士といっしょにミサにあずかることを喜んだ。ヤノ神父さまが来て、ミサの前に多くの人々の告白を聽いた。だれの告白も長かった。戦争が信者を教会へゆかせないので、思い、望み、云葉、行い、怠りによって犯した罪はずいぶん前からそのまま霊魂にこびりついていたから、油やあかで臭い作業衣と同じく洗濯に手間がかかった。

この夜中のミサはなんと心震えるものであったか！……ローマの地下のカタコンブでひそかにささげられたと云う古えのミサの気分もしのばれた。ヘンリック修士は輪送車に載せられたまま、賛美歌を歌っていた。耳なれないポーランド風のアクセントがそぞろに周りの人々の心を遠い国へ誘うようだった。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな…」と唱えるところで鳴らす鈴は、私がレントゲン管球のキャップで作ったものだったが、チンチンチン……と快い音を立てた。きっと天主さま

の御気に入ったであろう。

ミサは終った。病人は車や担架で病室へ送り帰された。医局員や看護婦や附添婦は急いで病棟へ帰っていった。ロマン修士と私とで後をすっかり片附けた。もとの通り透視台が坐り配電盤が置かれた。ソケット一つだって間違って差しこんではない。私は手のひらで口をぬぐった。

御馳走は何もなかった。

私は星空の下の凍った道を歩いて家へ帰った。ドナト神父さまが歌ってきかせた

静けき真夜中　牧の御室
楽しくも聞こゆる　御使の祝ぎ歌
「御救いの君　今あれませり」

静けき真夜中　しずが馬屋
夜寒をも知らずに　馬ぶねに眠ります
御子のみ姿　いともかしこし

静けき真夜中　来たり拝め
尊きみどり児の　いつくしき御光
いみじく奇(く)しく　やみをば昭らす

を歌いたくなったが、曲をよく憶えておらぬので歌えなかった。来年は上手になって歌えるかも知れないと考えもしたが、来年は天に昇っているかも知れない。天へいったら、どんな下手な歌手でも、すばらしい音を出すだろう。

浦上天主堂の前を通った。大きな真暗な建物だった。軍司令部からの注意で、ことしは夜中のミサは行われないのであった。それでも祭壇にはキリストがいらっしゃるのだから、ひっそりとした建物に寄りそうて、祈りをささげている人の気配がしていた。

家に帰ってみると、燈火管制の細い明りの中に、妻は首をすくめて起きていた。布団には小さいくりくり頭とおかっぱとがのぞいていて、その傍に小さな救急袋がそれぞれ置いてあった。

（続く）

1「……なお近く『亡びぬものを』の姉妹篇『いとし子よ』が発刊されるが、引き続きザビエル四百年祭開催地長崎を背景にした『輝く港』（仮題）の構想を練っている」。（『長崎日日』1949年9月14日［第二版］）
2　この文字は、原稿ではひらがなの「ふ」のような崩し書きで書かれている。
本稿では、この「ふ」型の「国」の個所を注で明示しておく。それは、崩さずに「国」と書かれている箇所（これらには注をつけていない）が他にあるからである。作者がこの両者を使い分けているかいないかはわからない。
3　注2参照
4　注2参照。
5　注2参照。
6　注2参照。
7　注2参照。
8　注2参照。
9　注2参照。

konishi@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp